



岡 邦行さん

ルポライター

おか・くにゆき 1949年、福島県南相馬市生まれ。法政大学社会学部卒業。出版社勤務を経てフリーに。1999年『野球に憑かれた男』（報知新聞社）で、第3回報知ドキュメント大賞を受賞。著書に『南相馬少年野球団』（ビジネス社）、『伊勢湾台風 水害前線の村』（ゆいぽおと）などがある。



『大島鎌吉の東京オリンピック』
東海教育研究所 1,800円

BOOKS

本書は、陸上三段跳の元世界記録保持者で、戦前ロス五輪銅メダリストの大島鎌吉（一九〇八〜八五）の生涯を追った評伝だ。世界の頂点を競った選手時代。新聞社特派員として戦火のヨーロッパを取材した戦争の時代。戦後は日本のアマチュアスポーツの国際復帰と五輪実現のために世界を駆け回った日々が描かれる。生涯を貫く行動指針は、「真のオリンピック精神とは何か」という思いである。

——大島鎌吉が、近代オリンピックの父・クーベルタン男爵の「オリンピックモットー」に出会ったのは一九三二年、ロス五輪の時と書かれています。当時彼は二十三歳の大学生でした。

当時の関西大学の学報に、大学四年の大島がオリンピックモットーを英文で紹介した文章が残されています。「The important thing in Olympic Games is not to win, but to take part.（オリンピックにお

いて、重要なことは勝つことではなく参加することです）The important thing in life is not the triumph, but the struggle.（人生において重要なことは、大成功することではなく努力することです）」という書き出しで始まるオリンピックモットーは、今は有名ですが、当時は日本で知られていなかった。大島はこれをオリンピックからの帰朝成果として大学へ報告したのです。

——普通、スポーツ選手の文章と

BOOKS

例えば、試合でどう戦ったのかという状況や、勝利していかにか感動したかという心情を綴ったものを、書く側も読む側も考えているように思います。

「学生の自分は学ぶことで、スポーツは学問の余暇にするもの」というアマチュアリズムは、大島の生涯を貫いていたポリシーの一つです。こんなエピソードもあります。金沢商業学校時代に頭角を現した大島の元に、関東陸上の雄・早稲田大学をはじめ数々の大学のスカウトが来た。その際に、学費や遠征費の免除だけでなく、小遣いまで出す条件を出した大学があった。彼は憤りを感じて、「学生の自分は何でしょうか」と追いついたんですね。

日本のワイマールと呼ばれた金沢で生まれ育った大島は、郷里出

身の思想家たちの著書を愛読し、中でも西田幾多郎に傾倒していた。大島は進学先に、宮本武蔵の『五輪書』を座右の書にしていた岸源左右衛門がいた関西大学を選び、そこで才能を開花させます。反骨精神と、誰を相手にしても臆することなく、信念を曲げずに接していく姿勢は、大島の生き方の大きな特長です。

敗戦後、日本のアマチュアスポーツの国際復帰に奔走する場面や、一九六四年の東京オリンピックの招致、そして選手強化本部長、選手団長となって五輪を成功させていく際にも、それが発揮されていたんですね。

——日本はこの九月、二〇二〇年東京オリンピック開催のニュースに沸き立ちました。開催は七年後です。

オリンピックの理想とは何だろうか、この七年間に何ができるのか、と考えている人にも、ぜひ大島鎌吉の思想に触れてもらいたいと思っています。

大島は、東京五輪では科学的なトレーニングを導入して金メダル十六個を実現させました。その後「五輪ボケ」の栄光に酔っていた関係者をよそに、国民全体が平和な暮らしの中でスポーツを楽しめるようにと、健康とスポーツの啓蒙活動と平和運動に晩年を捧げていきました。原子力への警鐘も鳴らしていました。

「日本の繁栄は、虚弱を隠した虚飾の繁栄だ」と看破し、原子力時代に人間の尊厳を守らなければならぬと訴え続けていた。これも「東京オリンピックをつくった男」と呼ばれた大島の姿です。